大学生の適応についての質的研究

綾野　眞理

1.　問題と目的

大学生における不適応の様相が変化してきているということが，多くの研究者より指摘されている．その中で山田（2006）は，これまで大学生の不適応の原因として注目されてきた，大量留年やスチューデントアパシーに加えて，中学生・高校生で問題視されてきた不登校の問題が，大学生レベルにも広がってきていると述べている．筆者が勤務する大学においても，毎年，留年や退学に至る学生が後を絶たない．山田の指摘したところを実感する毎日である．

文部科学省の平成 23 年度学校基本調査によると，大学・短大への進学率は高校卒業者の 54.5%と半数を超えた．2001 年に開催された「21 世紀の学生相談を展望する」というテーマで開催された，学生相談学会のシンポジウムの報告の中で，高石（2006）は 10 年後の大学の状況を予測して，”大学はもはや，親に’大学ぐらい出ておかねば’と言われ’何が何でも大学ぐらい出ておかねば’という義務的意識で入学してくる者が増えてくるであろう”と述べている．現在は，高石が予測した丁度その年にあたるが，筆者が大学のキャンパスで出会う学生からは，動機づけがあいまいなままとりあえず入学してきた，あるいは，高校卒業後，就職を希望していたが不況で叶わなかったために，やむなく進学したという声が多く聞かれる．そのような学生は，大学で勉強することについて，「せっかく入ったので卒業はする．そのために単位は欲しいが勉強は嫌い」と言う．さらに，「みんなそんなもんだと思いますよ」と追い打ちをかける．その一方で，大学入試制度の多様化（例えば従来の学力試験によらない AO 入試その他の導入）で，実務的な資格を取得するため，あるいはスポーツなどの部活動に打ち込むためといった、学業面以外の目的以外での動機づけのはっきりしている学生もいる．まさに 10 年前の予測が現実のものとなっているという印象を受ける．

とはいえやはり，大学では日々授業が行われ，出席が厳しくチェックされ，課題が課せられ，定期試験が行われ，卒業時には卒業論文の提出が必修となっている場合も多い．大学では高校までと比較すると，学習内容も専門性が高くなり，量も多くなる．より自主的・能動的な学習態度が要求される．また，学習面以外においても，高校までは日常のさまざまな場面で周囲の大人に，大なり小なり助けられながら過ごしてきた．それが大学生ともなれば，時間管理や健康管理など，自己コントロールをしながら日常生活を送ることが期待される．筆者の勤務する大学では，1年次からクラス担任を設け，学生一人一人の指導に力を入れているが，それでも，高校までのようにホームルームがあったり，職員室に行けば先生に毎日のように会えるというわけではない．担当教官と授業以外で会うには，自分でアポイントメントを取るという能動的な関わりが要求される．大学では高校までと比べると自由度が高まった分，自己コントロールの能力，自主的・能動的な態度が学習面・生活面で要求される．

Erikson, E. H.（1959）は青年期の心理的発達課題は自我同一性の確立である述べた．自分が何者かを知り，これからどこに向かって進むのかを見極め，自分の存在意義を確信することである．その過程では，時に悩み，苦しみ，試行錯誤の中から自ら見出していかなければならない．しかし，それに耐えられない学生，すぐに正解を求める学生，「悩めない学生」が増えている（高石，2009）．最近の大学生は元気がない，不登校，やる気がない，大人になろうという意欲がない，いつまでも子供などと，否定的な評価をされることが多いが，悩むエネルギーもないということであろうか．筆者は，教員あるいは学生相談担当員として，日々，このような大学生たちと接しながら，彼らが生き生きと大学生活を送り，やがて社会に出ていくための力を養っていくことができるのかを模索している．本研究では，大学生が学生生活についてどのようなことを考えているのか，自分自身のことをどのように見ているのかを探り，学生支援の方法について知見を得ることを目的とする．今回は，心理学の授業におけるリアクションペーパーの内容を質的・量的に分析したので報告する．

2．方法

対象

中部地方の4年制大学で教養科目の心理学を受講する学生を対象に質問紙調査を実施した．調査 1 への協力者は 87 名であったが，その中から回答に不備のある 3 名を除いて 84 名の回答について分析を行った（Table 1）．

Table 1 調査対象

学生区分			学年 1	学年 2	学年 3	学年 4	合計
日本人	性別	男子	44	1	9	5	59
			97.8%	100.0%	81.8%	100.0%	95.2%
		女子	1	0	2	0	3
			2.2%	.0%	18.2%	.0%	4.8%
	合計		45	1	11	5	62
			100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
留学生	性別	男子	6	0	1	2	9
			40.0%	.0%	25.0%	100.0%	40.9%
		女子	9	1	3	0	13
			60.0%	100.0%	75.0%	.0%	59.1%
	合計		15	1	4	2	22
			100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
合計	性別	男子	50	1	10	7	68
			83.3%	50.0%	66.7%	100.0%	81.0%
		女子	10	1	5	0	16
			16.7%	50.0%	33.3%	.0%	19.0%
	合計		60	2	15	7	84
			100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

調査内容

質問紙の内容は以下の通りである．

1. 大学生活に対しての目標や期待の有無についての問いで，「ある」と答えた場合にはその内容について自由記述で回答を求めた．
2. 実際の大学生活は期待通りかどうかという問いに「はい」，「いいえ」のいずれの場合も，その理由について自由記述での回答を求めた．

3. 自己イメージについては，まず自分を何かに喩えてみた後に，その理由を自由記述で答えてもらうという方法を用いた．自己イメージなど，個人の内面について尋ねる場合，それを難しいと感じることが少なからずあることを，これまでの研究や心理臨床の場面での体験から感じていた．自己イメージが漠然としている場合はもちろんのこと，はっきりとした自己イメージを持っている場合であっても，さまざまな心理的要因が働き，意図的かそうでないかにかかわらず，表現することが妨げられるのである．「何かに喩える」という作業はこのような要因の影響を軽減し，表現するのが難しいことがらについての，より率直な回答が得られやすい（Cox & Theilgaard，1987）．そこで，先にまとめた研究 （Ayano，2006）の中で用いたIshiyama（1988）によるVisual Case Processing （VCP）を簡略化したものを採用することにした．そもそもVCP では，自分自身が体験したあるできごとについて，自分自身や他の登場人物のことを何かに喩え，それらを描画を用いて表現した後に，その体験を言語化していくという作業を段階的に行う．そのプロセスを通して，自分の感情への気づきを促すものである．本研究では，その特質を損なわないよう留意しながら，集団での実施を考慮して簡略化して実施した．

分析方法

1. 「はい」「いいえ」など自由記述以外の質問項目はSPSS19 を使用して量的分析，統計処理（カイ２乗検定）を行い有意差の検定を行った．
2. 自由記述の回答によって得られたデータの分析には質的研究の手法であるグラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA) を採用した．質的研究では，「ある喩えに対する対象者なりの意味」などの個別的な事象を分析することができ，量的研究では見落とされがちな出現頻度の低い事象も取り扱うことができる（Silverman，2000）．このことから，本研究で意図するところに最も適していると判断した．GTA の具体的な手法については諸派がある

が，本研究では Corbin & Strauss（2008）の方法を参照した．概要は以下の通りである．詳細は研究プロセスと結果の項で述べる．

①それぞれのデータを読み，そのテーマを見つけ出し，それぞれのテーマに名前（コード）を付ける．もしも，１つの回答に２つ以上のテーマが含まれている場合は，それぞれを１つのテーマごとに分割する．

②データ同士を比較し，類似したテーマのものをまとめて１つのカテゴリーとする．どのカテゴリーにも入らないデータが出てきた場合は，新たにカテゴリーを生成する．

③①と②を繰り返し，すべてのデータのカテゴリー分けが終了した段階で，各カテゴリー間での連関を見出し，理論・モデルを構築する．

3. 結果と考察

3.1. 量的分析の結果

大学生活への目標や期待があるか

大学生活に対して，目標や期待があるかどうか尋ねた結果をTable 2にまとめた．対象者全体の76.6%（男子学生：72.6%；女子学生：93.3%）が目標や期待があると答えた．女子学生の方が高率であるが，全体数が少ないこともあり統計的な有意差はみられなかった．さらに，日本人学生と留学生とを比較してみると，目標や期待があると答えたものが日本人学生で73.7%（男子学生:72.2%；女子学生：100%），留学生で85.0%（男子学生：75.0%；女子学生：91.7%）と留学生でやや多く見られたが，こちらも有意差は見られなかった．全体で約4分の3の学生が大学生活に何らかの目標や期待を持っているという結果が得られた．

Table 2. 大学生活への目標や期待があるか

学生区分			性別 男子	性別 女子	合計
日本人	大学生活への目標や期待	はい	39 72.2%	3 100.0%	42 73.7%
		いいえ	15 27.8%	0 .0%	15 26.3%
	合計		54 100.0%	3 100.0%	57 100.0%
留学生	大学生活への目標や期待	はい	6 75.0%	11 91.7%	17 85.0%
		いいえ	2 25.0%	1 8.3%	3 15.0%
	合計		8 100.0%	12 100.0%	20 100.0%
合計	大学生活への目標や期待	はい	45 72.6%	14 93.3%	59 76.6%
		いいえ	17 27.4%	1 6.7%	18 23.4%
	合計		62 100.0%	15 100.0%	77 100.0%

実際の大学生活に対する評価

実際の大学生活について，期待通りかどうかを尋ねた（Table 3）．まず全体でみると，女子は 71.4%が期待通りであると評価しているのに対し，男子の半数以上（54.8%）が期待通りではないと答えた．

次に，日本人学生と留学生を比較してみた．日本人では男子学生の 46.3%，女子学生の 33.3%，合計で 45.6%と期待通りであると答えた者が半数を下回った．これに対して留学生では，期待通りと答えたものが男子学生の 37.5%，女子学生の 81.8%，合計で63.2%と，男女差が顕著であった．

Table 3. 実際の大学生活に対する評価

学生区分			性別 男子	性別 女子	合計
日本人	期待通りか	はい	25 46.3%	1 33.3%	26 45.6%
		いいえ	29 53.7%	2 66.7%	31 54.4%
	合計		54 100.0%	3 100.0%	57 100.0%
留学生	期待通りか	はい	3 37.5%	9 81.8%	12 63.2%
		いいえ	5 62.5%	2 18.2%	7 36.8%
	合計		8 100.0%	11 100.0%	19 100.0%
合計	期待通りか	はい	28 45.2%	10 71.4%	38 50.0%
		いいえ	34 54.8%	4 28.6%	38 50.0%
	合計		62 100.0%	14 100.0%	76 100.0%

山田（2006）は，「不本意入学」，つまり気が進まず入学した者，あるいは「入学後不本意」，つまり入学後，さまざまな理由で大学に違和感を感じるようになってしまった者が，授業放棄や不登校につながりやすく，結果的に休学や退学などに陥りやすいと述べている．山田（2006）は，不登校や退学に至る学生の多くが，入学直後や年度当初の早い時期から，意欲減退などの不適応状態を示すと報告している．新年度が始まったばかりの時期に行った調査で，目標も期待もないと答えた学

生が全体の4分の１存在するということは，不適応に陥る可能性を秘めた学生が，それだけ存在すると言っても過言ではない．また，大学が期待していたものと違うと答えたものが半数を占めたが，これは，山田（2006）の言う，「入学後不本意」とほぼ同様の状態と言えよう．すなわち，入学後不本意の状態にある学生が半数存在するということになる．次項では，これらの結果を踏まえて，数字からは見えてこない，学生の大学生活についての思い，適応感，自己イメージについて，個々のデータの分析を通して詳しく見ていくことにする．

3.2. 質的研究のプロセスと結果

質的研究では，研究のプロセス（調査の手続き，分析の手続き）を詳細に記述することが重要とみなされている．そうすることにより，質的研究にとっての重要な評価の基準である，確実性（dependability）を高めることができるとみなされているからである（Kirk & Miller, 1986）．そこでこの項では，紙面の許す限りデータの収集と分析のプロセスを詳細に記す．

データの収集

データの提供者は前項と同様，中部地方の 4 年制大学で，教養科目の心理学を受講する学生である．人数などの詳細はTable 1に記した通りである．データの収集はX年４月第１回目の授業で行った．授業のオリエンテーションの後，心理学とは何か，心理学の歴史，心理学の理論的背景などの導入的内容の講義を行った．その後，授業に対するリアクションペーパーという形で質問紙による調査を実施した．また，全授業を通して実施される質問紙，各種心理テストなどを研究目的で用いることがあること，データの内容を引用する場合には個人が特定されないように留意することなどを説明し，書面で同意を得た．尚，同意するかどうかは成績とは全く無関係であることも説明した．出席者全員から同意書を得ることができた．

リアクションペーパーでは，前項で述べた質問項目に加えて，授業についてのふりかえりのための設問「こころとはどのようなものだと思いますか？」「今，何か

悩みがありますか？」「今日の授業の感想やコメント，メッセージなど，自由に書いてください」が含まれているが，今回の分析からは除外した．リアクションペーパーは授業の最後に筆者が回収した．

分析のプロセス

まず最初に，リアクションペーパーの自由記述の回答（データ）を設問ごとによく読み，その内容のテーマを見つけながらワープロ原稿に直した．もしも，１つのデータに２つ以上のテーマがみつかった場合は，テーマが１つずつになるようにデータを分割した．さらに，それぞれのテーマの意味や，特徴的な表現を用いてテーマごとに名前をつけた（Open coding）．あわせて，データの出所を明らかにし，いつでもオリジナルのデータに戻ることができるように，それぞれ回答者に分類コードを配し，各データの末尾に記した．

次に，それぞれのデータ同士を比較し，類似するものをまとめてカテゴリーを生成し命名するというプロセスを，個々のデータすべてがなくなるまで繰り返した（カテゴリー生成）．　まず日本人の回答者からのデータを分析して基本的カテゴリーを生成し，それに留学生回答者のデータを分析して生成したカテゴリーを合わせていった．カテゴリー生成のプロセスは一方通行ではなく，すべてのデータが収まるようにカテゴリーを作り直すということを何度も繰り返した．別々のカテゴリー間に共通点が見つけられればそれをひとくくりにして，上位カテゴリーを作る（カテゴリー・グループ）というプロセスを繰り返した（Axial coding）．また，カテゴリー・グループ同士に何らかの繋がりが見出された場合は，それを図面化（Logic diagram）するといったプロセスを幾度となく繰り返した．

また，研究のプロセスを通して，その時々の分析の方法，アイデア，気づいたこと，所感などを，文章，メモ，図とさまざまな形式で記録に残した．これらの記録は，本報告をまとめるにあたって，資料として用いた．

●　大学生活への目標や期待

ここでは，「大学生活への目標や期待」についての自由記述回答を分析したプロセスと，そこから得られた結果について述べる（Table 4）．手順は上に述べた通りである．

まず，目標や期待があるかないかでカテゴリー分けを行った．次に，「ない」というカテゴリーのデータを詳しく見た．すると，「いまだにない」というように，「ない」状態に対して全く何もしていないか，あまり積極的に目標を探そうとしていないものと，「大学でやりたいことをみつける」，「4年間で自分のやりたいことがみつかるか期待」というように，積極的に探そうとしているものとに分類できた．前者に「なにもしていない」，後者に「模索中」というカテゴリー名をそれぞれつけた．それに従い，目標がないというカテゴリーを二つのカテゴリーからなるカテゴリー・グループに昇格させた．それに従って，「目標がある」というカテゴリーも，仮にカテゴリー・グループとして取り扱うこととした．

Table 4 日本人学生の大学生活への目標や期待

カテゴリー・グループ	カテゴリー	下位カテゴリー	回答の引用（J数字は回答者の分類コード）
目標や期待がない	何もしていない		• 目標はいまだにない。J2
	模索中		• 大学でやりたいことをみつける。J9, J13 • この4年間で自分のやりたいことがみつかるか期待の心。J65
目標や期待がある	学習面	消極的	• とりあえず卒業できるように単位をとる。J7, J22, J37 • 進級する。J37, J40
		積極的	• いろんな勉強がしたい。J55 • 将来役立てられるようしっかり学んでいきたい。J53 • 販売などの流通業を学びたい。J67 • 教員をめざしている。J6, J54, J56 • 会計士になること。J30 • アメリカに留学すること。そして英語を身につける。
	学習面以外	人間的成長	• 立派な人間になること。J27, J33 • 忍耐強くなる。J46
		充実	• 充実した生活をする。大学、サークル、バイトを両立させる。J60
		対人関係	• 友達をつくる。J45, J67 • 学生会を楽しむ。J62
		部活動	• 部活で良い成績を修めたい。J3, J29 • テニスがうまくなりたい。J30 • プロの選手になる。J47
		将来のため	• 社会に出てからプラスになるようにしたい。J5 • 将来につながる大事な道。J34
		やり直し	• 高校の時からの問題を解決したい。J33
		日常的	• 髪を 10cm 伸ばす。J12 • 車を買う。J40

「目標や期待がある」というカテゴリー・グループ内のデータを分析すると，学習に関する内容と，それ以外のものに分類することができた．前者を「学習面」，後者を「学習面以外」というカテゴリーとし，ここで，「目標や期待がある」を正式にカテゴリー・グループとした．「学習面」に分類したデータをさらに詳しく見ていくと，卒業や進級など，とりあえず大学生としてやるべきことをやるというものと，特定の科目，資格取得などのための意欲的に学習に取り組む姿勢を示唆するものがあった．前者を「消極的」，後者を「積極的」という下位カテゴリーとした．

「学習面以外」のデータを比較検討していくと，「人間的成長」に関するもの，「充実」した学生生活を期待するもの，「対人関係」に関するもの，「部活動」に関するもの，「将来のため」という卒業後を見越した目標を持っているもの，高校でのやり残したことを「やり直し」すること，大学生活とは直接関わりのない「日常的」な目標や期待とに分類することができた．それぞれを下位カテゴリーとした．

次に，カテゴリーの精緻化を図るために，同じ質問に対する留学生の回答によって得られたデータを分析した．基本的カテゴリーは日本人学生によるものを用い，分類に無理のあるものは新たにカテゴリーを生成したり，カテゴリー同士を融合してカテゴリーの再編を行った（Table 5）．

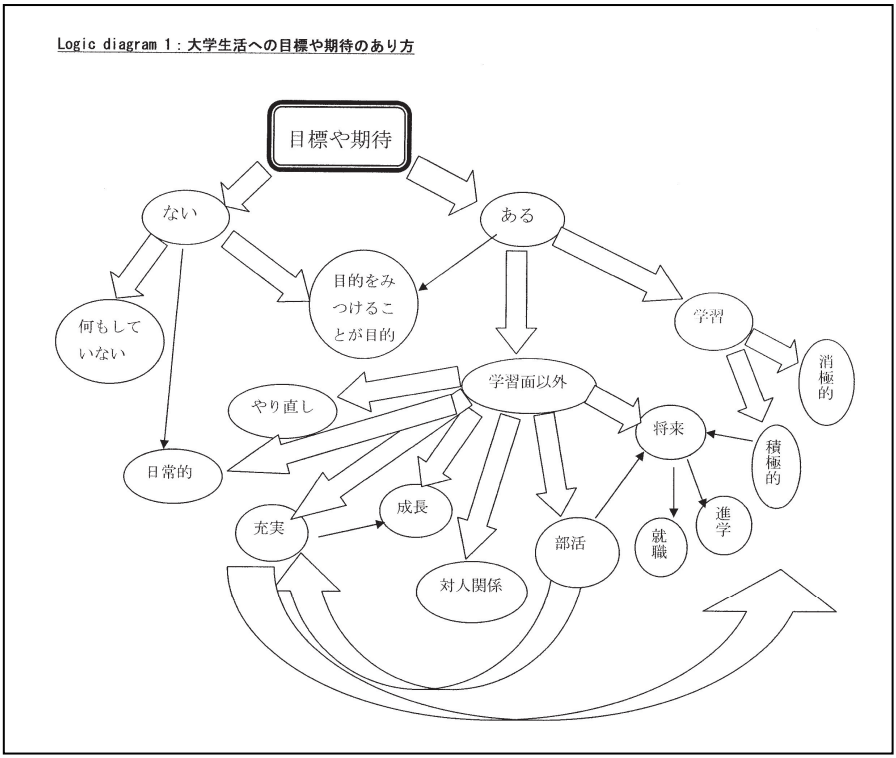
Table 5 留学生の大学生活への目標や期待

カテゴリーグループ	カテゴリー	下位カテゴリー	回答の引用 （R数字は回答者の分類コード）
目標がある	学習面	日本語能力	• 日本語能力試験1級に合格する。R5 • 日本語でペラペラ話せるようになりたいです。R23 • 今は聞くことと話すことを高めるのが一番重要な目標です。R14
		教科の学習	• 単位もいっぱい取ろうと思う。R5 • たくさんの知識を身につける。R3 • 一生懸命勉強して、いい成績を得たい。R13 • できるだけたくさんの知識を習いたい。自分の能力を昇格させたい。R16 • 大学を卒業する。R25 • 経営学についての知識を学びたい。R7
	学習面以外	対人関係	• たくさん友達を作る。R2, R13 • 他の人の心理、理解したい。他の人と交流しやすくなりたい。R16
		就職・仕事	• いい生活をするために大学生活をして就職すること。R1 • 卒業したらいい仕事を見つける。R21 • 卒業したら自分の会社をつくるつもりです。R12 • 英語を学び、経営を学び、日本で就職するつもりです。R17
		進学	• 大学院に入りたいです。R20

留学生からのデータには，日本人学生のカテゴリー・グループの「目標がない」に該当するものは見られなかった．学習面というカテゴリーでは，当初，日本人データのカテゴリーの「消極的」「積極的」で分類を試みたが，単位を取得して卒業するというものが，はたして日本人学生の「とりあえず進級あるいは卒業」と同等に扱ってよいものか疑問であった．留学生の現状を見ると，まずは，日本語能力を高めた上ではじめて，大学本来の教科の学習が可能となる．評価は日本人学生と同

じ基準で行われるため，日本語能力が相当高くなければ，大学の授業についていくのは困難である．つまり，日本語能力を高めることも大変であるし，進級や卒業もかなり意欲的に学習しなければならず，日本人学生データの分類で採用した，「消極的」「積極的」というカテゴリーは不適切であるように思われた．そこで，新たに，「日本語能力」と「教科の学習」という二つのカテゴリーを設けた．

続いて，学習面以外のカテゴリーに分類したデータを分析してみると，「たくさん友達をつくる」，「他の人の心理，理解したい．他の人と交流しやすくなりたい」など，対人関係に関する回答があった．これらは日本人データ分析で生成した「対人関係」と同じ下位カテゴリーに分類した．「いい生活をするために大学生活をして就職すること」など，大学卒業後の生活や就職を目標としており，大学をそのための足がかりと考えているものについては，「学習面以外」カテゴリーに分類し，さらに「就職・仕事」という下位カテゴリーを生成した．大学院への進学を目的としているものは，「進学」という下位カテゴリーに入れた．ここで，問題となったのは，「英語を学び，経営を学び，日本で就職するつもり」など，卒業後の目標を達成するために，大学では「学習面」に力をいれたいとするものが多くみられたことである．しかし，ここでは回答した時点での最終目標や期待に着目して分類することにした．



以上の分析結果から，何らかの繋がりがあるカテゴリー同士をつなぎ，全体を理論的図式に表した（Logic diagram 1）．片矢印の方向は，論理的流れや影響の方向を示している．両矢印はお互いに両方向に影響しあっていることを表している．白い矢印はデータに表れていた連関であり，黒い矢印は分析をしていく過程で見出されたもを表している（Logic diagram すべてに共通）．「目標や期待がない」というカテゴリーの中には，その状態に対して「何もしていない」というカテゴリーと，「大学生活の中で見つけられることを期待している」，すなわち「目的を見つけることが目的」となっている，つまり，「目的がある」というカテゴリーに含まれるものがあった．その一方で，「目的がある」というカテゴリーの中で，学習面以外の日常的な目的にみられるものは，「髪を 10ｃｍのばす」など「大学でなくてもで

きること」という特徴があった．そのような目的は大学生活に対する目的としては「ない」という状態に類似しているとみなした．「将来」というカテゴリーは「積極的学習」，「部活」，「就職」，「進学」と連関がみられた．つまり，「積極的学習」カテゴリーの中には，将来の「進学」，「就職」を見越して，大学生活の中で準備をしているという回答があった．また，「部活」ではプロの道を目指して頑張っているものがあった．さらに，「充実」カテゴリーでは，「人間的成長」を暗示するような表現が見受けられた．

● 実際の大学生活の評価

前項と同様の手法で分析した．データは，実際の大学生活について期待通りかどうかという質問で，「期待通り」と「期待通りでない」のそれぞれについて，その理由を自由記述で回答してもらった．便宜上，カテゴリー・グループを「期待通り」と「期待通りでない」とし，分析を開始した．

日本人学生のデータ（Table 6）では，カテゴリー・グループ「期待通りでない」では，「時間的ゆとりのなさ」，「自由のなさ」，「授業の大変さ」，「能力不足」から「大変さ」というカテゴリーを生成し，それに加えて，「充実感や楽しさ」，「環境」「授業」というカテゴリーを生成した．カテゴリー・グループ「期待通り」では，「授業」に関するものと「授業以外」の 活動とに分類された。まず，「授業」カテゴリーでは，「興味のあることを学んで」，「知識を深めること」など，学業に積極的に取り組む姿勢が見られる。また，「ゼミや先生方との交流」など、大学らしい学習のあり方に魅力を感じているようすが見受けられる。次に，「授業以外」カテゴリーでは、「部活動・サークル」，「友人関係」，「楽しい」，「自由」，「高校と違う」などの項目が見られ、それぞれをサブカテゴリーとした。

次に、留学生によるデータの分析を分析した（Table 7）．日本人学生によるデータと同様，「期待通りである」と「期待通りでない」という２つのカテゴリー・グループごとに分析を行った．カテゴリー・グループ「期待通りでない」では，「時間的ゆとりのなさ」，「授業の大変さ」から「大変さ」というカテゴリーを生成し，

Table 6 日本人学生の実際の大学生活

カテゴリー・グループ	カテゴリー	下位カテゴリー	回答の引用（J数字は回答者の分類コード）
期待通りでない	大変さ	時間的ゆとりのなさ	• 朝起きるのがそんなにおそくない。J7 • 休憩が短い。J44 • 授業が長い。J45 • 帰りが遅い。J43
		自由のなさ	• あまり自由じゃない。J31 • もっと自由だと思っていた。J38, J62
		授業の大変さ	• 学校にいる時間は少ないけど、まず、休めないのが辛い。J53 • 意外と授業が多い。J59
		能力不足	• もう少しうまく行くと思った。J13 • 自分のおもっているようにならなかった。J4 • 自分のできなさすぎるところ。J35
	充実感や楽しさ		• もっと楽しいイメージだった。J5 • もっと充実しているものと思った。J18
	環境		• 施設があまり整っていない。J6 • 部活の設備の悪さに驚いた。J14 • 予想外の人がたくさんいる。J51
	授業		• 先生の説明がわかりにくい科目があること。J11 • あまり自分が興味ある講義がなかった。J36 • 自由席じゃないこと。J49
期待通り	授業		• 講義で自分の興味のあることを学んで、ゼミや先生方との交流で知識を深めることもできる。J3 • 予想していた通りの授業内容で快適。J57 • やればやるだけ自分のためになりそうなところ。J42 • 教職がとれること。J56
	授業以外	部活動・サークル	• サークルが楽しい。J60
		友人関係	• 新しい友達とかも増えてよかった。J15 • 友達との交流。J63
		楽しい	• 楽しくて充実している。J47
		自由	• いろんなことがある程度、自由なところ。J50
		高校と違う	• 高校より楽。J10 • 髪、伸ばせる。J12 • 高校とは違い、自分ですべてやること。J48

その他に「充実感や楽しさ」，「環境」，「対人関係」というカテゴリーを生成した．「期待通り」のカテゴリー・グループでは，「授業」というカテゴリーと「友人関係」，「楽しい」，「自由」，「母国と同じ」という下位カテゴリーを合わせて，「授業以外」というカテゴリーを生成し，二つのカテゴリーを生成した．日本人学生の分析結果と比較すると，ほとんどのカテゴリーが共通していたが，前者のカテゴリー・グループ「期待通り」のカテゴリー「授業以外」のサブカテゴリーの「高校と

違う」（日本人学生）と，「母国と同じ」（留学生）のカテゴリー名を「前環境との比較」というカテゴリー名に変更した．

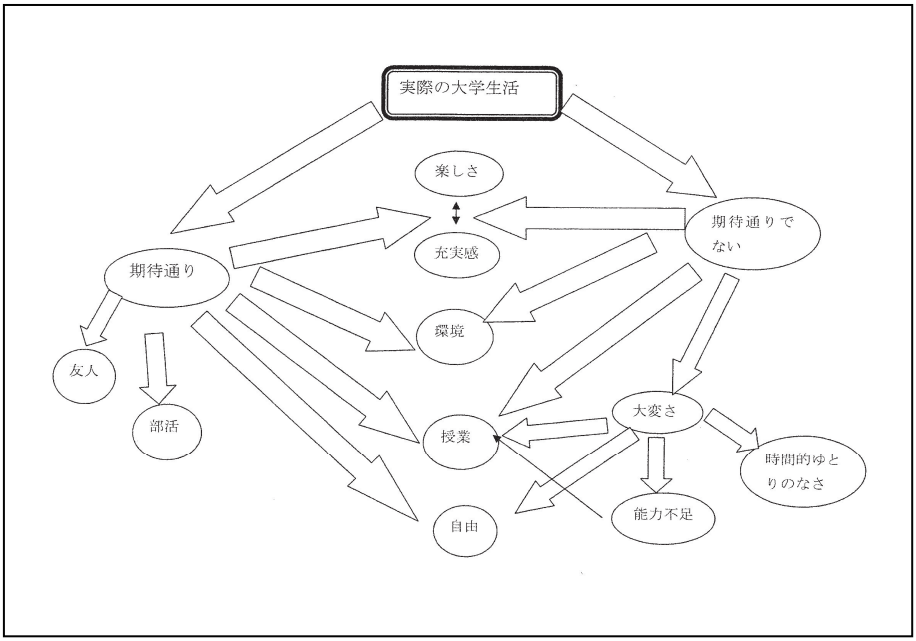
Table 7 留学生の実際の大学生活

カテゴリーグループ	カテゴリー	下位カテゴリー	回答の引用（R数字は回答者の分類コード）
期待通りでない	大変さ	時間的ゆとりのなさ	• 遊ぶ時間が少ない。R4 • 予想より忙しい。R24
		授業の大変さ	• 勉強が難しい。R1 • 授業の内容がちょっと難しい。R5 • 考えたよりかなり難しいと思います。R17
	充実感や楽しさ		• 思ったより楽しくないです。R8
	環境		• 想像したより小さい。R19
	対人関係		• 人と人の距離が大きい。語学学校と全然違った感じがします。R10
期待通り	授業		• 先生の教え方が予想通り。R14 • ○○大学は勉強するのに目標が強いですから、いいところかと思います。R18 • 日本語をうまくなる。R20
	授業以外	友人関係	• みんなと仲良くなっている。R2 • 友達もいっぱいできたから楽しいです。R15
		楽しい	• 日本で留学すると楽しい。 • 日本で留学することが楽しむ。R11
		自由	• 自由な空間。R12 • 自由に科目を選ぶこと出来ることです。
		母国と同じ	• 国の大学と同じです。R23

これまでの分析をもとに，前設問と同様に，理論的図式を生成した（Logic diagram 2）．

「期待通り」カテゴリー・グループと「期待通りでない」カテゴリー・グループの中には，共通した「楽しさ」，「充実館」，「環境」，「授業」，「自由」の５つのカテゴリーが含まれていた．「期待通り」はこれら５つのカテゴリーが充足されている状態と関係が見出され，「期待通りでない」は充足されていない状態と関係が見出された．さらに「期待通りでない」では，「大変さ」というカテゴリーとの関係が見られ，「授業」，「自由」，「能力不足」，「時間的ゆとりのなさ」のそれぞれとの繋がりが見出された．この中の「能力不足」は，「授業」との連関があるものと予測された．

Logic diagram 2: 実際の大学生活に対する評価とその影響



● 自己イメージ

これまでと同様の方法で，「大学生の自己イメージ」についての自由記述回答を分析したプロセスと，そこから得られた結果について述べる（Table 8）.

まず，このステップでは，使用されているメタファー自体よりも，どうしてそうなのかという個々の学生が記した理由づけに注目して分析した．その内容によって，「頑張ろうとしない自分」，「精神的に弱い自分」，「性格に問題のある自分」，「非力な自分」，「不安定な自分」というカテゴリーを生成した．それらをひとまとめにして「ネガティブイメージ」というカテゴリー・グループを生成した．このカテゴリー・グループは，分析を進めていく段階で，「潜在能力あり」と「力不足」という上位カテゴリーに分類された.

次に，「頑張ろうとしている自分」，「頑張っている自分」，「大切な自分」，「自由な自分」というカテゴリーを生成し，それらを合わせて「ポジティブイメージ」と

Table 8 日本人学生の自己イメージの分析結果

カテゴリー・G	カテゴリー	下位カテゴリー	回答の引用（J/R 数字は回答者の分類コード）
ネガティブイメージ	潜在能力あり	頑張ろうとしない自分	• 色で喩えるなら白。白は何色にも染まりやすい。けど私は目標がなく何かに向かって頑張ろうとしていないから色はそのまま白だから。J2 • 何も咲いてない木：何もないから。J31 • ノーテンキ。将来の目標もなく、ただ生きているだけーってカンジ。J13 • なまけもの。グータラな生活をしているから。J18, J54, J49,J58, J59 • その辺の石：特に何もしていないから。J23
	力不足	精神的に弱い自分	• 精密機械：ちょっとした衝撃や問題で動かなくなってしまう。自分もメンタルが弱く、ちょっとしたことですぐに落ち込んだり考え込んだりしてしまうので。J3 • ライオンに追われる獲物。J25 • シャーペンの芯：すぐ折れる。J51 • 考える人：色々なことを考えすぎちゃう。J60
		性格に問題のある自分	• 黒色：心がどすぐろいから。J21 • サボテン：近寄ると何だかトゲがある性格だから？J62
		非力な自分	• 子供：ついていくだけで精いっぱい。J45 • 車：自分一人では動くことができない。J40
		不安定な自分	• 車：熱しやすく冷めやすい。J10, J30
ニュートラルイメージ	あいまいでよくわからない自分		• 夕暮れ：明るくもなくくらくもなくはっきりしていないところ。J1 • グレー：はっきりしない感じ。J6 • 雲：そんな気分だから。J8 • チャンネルのさだまらないテレビ：色々な番組をみせてくれる。色々な物を見せすぎてひとつにしぼれない。J35 • 風：ぼんやりと周りに流されながらただよって生きている J43 • 白：何色にも染まる。J64
ポジティブイメージ	頑張ろうとしている自分		• 生まれて少したった鳥：飛ぼうとしている感じ。J7 • 芽：成長しきっていない発展途上。J26
	頑張っている自分		• 赤色。部活や就活にもえているから。J4 • 夏：性格が熱い。J17; ポジティブだから。J20 • マイケル・チャン：授業を寝ずに粘り強く受けている。J14 • レゴブロックの下の方のブロック：一年生は下積みやから。J27 • アリ：速くとかうまくものごとをすることはできませんが、ゆっくり正確にすることにこころがけているから。J22 • 猪：精一杯、前に走り続けることしか考えていないから。J56 • ロボット：色々な知識を詰め込まれているから。J57
	大切な自分		• 水：必要不可欠。J32
	自由な自分		• 鳥かごから解放された鳥：解放された自分。J48 • 飛びまわっている犬：今がすごく充実して楽しいから。J67

いうカテゴリー・グループを生成した.

さらに,「あいまいでよくわからない自分」というカテゴリーを生成し，他の2つのカテゴリー・グループと同列にするために,「ニュートラルイメージ」というカテゴリー・グループ名を便宜上つけた.

回答の内容を詳しく見ていくと,「頑張ろうとしない自分」からは,「何も頑張ろうとしていない」,「目標もない」,「何もしていない」と自己を打ち消すような言葉

が並ぶ．これらを何度も読み返してみると，そこには，能力やチャンスはあるのにそれを十分に活かしきれていない，どうしてもやる気が出ない，一歩を踏み出せないでいる自分自身へのいら立ちや落胆が透けて見えて来る．「精神的に弱い自分」のカテゴリーでは，「ちょっとしたことですぐに落ち込んだり考え込んだりしてしまう」，「すぐ折れる」，「考えすぎちゃう」など，自身の思考や行動のパターン，敏感さなどを客観的に分析し，「精密機械」，「シャーペンの芯」などに喩えている．「性格に問題のある自分」カテゴリーでは，「心がどす黒い」や「近寄るとトゲがある性格」といったさらに否定的な自己評価がみられる．ここでは，他者との関係に問題や不安を抱えている可能性がうかがえる．「非力な自分」では，「ついていくだけで精いっぱい」，「自分一人では動くことができない」など，他者と自分自身の姿を比較し自分の力不足を認識して劣等感に陥っているのではないかと思われる．「不安定な自分」では，頑張れる時もあるが，それが長続きしない自分自身の姿を車の不安定な調子に喩えている．

「ニュートラルイメージ」では，「明るくもなくくらくもなく」や「ひとつにしぼれない」，「何色にも染まる」など，ネガティブかポジティブかつかみにくい記述が分類された．これらの内容を見ていくと，自我同一性を求めてさまよう青年期の心性を表現しているようでもある．一方で，何らかのきっかけでネガティブな自己イメージに移行する，危うさのようなものを内包しているようにも見える．

「ポジティブイメージ」では，「頑張ろうとしている自分」，「頑張っている自分」，「大切な自分」，「自由な自分」の４つのカテゴリーが含まれる．まず，「頑張ろうとしている自分」カテゴリーでは，巣立ち間近の鳥や植物の芽に喩えて，これから力を発揮しようとしている前段階にいる自分の姿がイメージされている．「頑張っている自分」カテゴリーでは，現時点で頑張っている自分の姿がイメージされている．「赤色」，「夏」，「猪」と言ったエネルギーや熱，動き，力を感じさせるメタファーが多く用いられているのが特徴的と言える．また，「アリ」や「レゴブロックの下の方のブロック」など，小さくて力が弱い，目立たない存在のものであっても存在の意味を見出している．存在の意味については，「水：必要不可欠」という記

述からも見られるように，ポジティブな自己イメージの形成には重要な要因であることが示唆される．また，「鳥かごから解放された鳥」，「飛びまわっている犬」など，さまざまな制約から解放され，自律的に動き回ることができている状態が充実感にとって重要な要因であることが示唆される．

ここまで，日本人の学生の回答により基礎的なカテゴリーの生成を行ったが，その精緻化を図るために，異なる文化圏からの学生から得られたデータを加えて再度，カテゴリーの生成を行う．前段階の分析から，「ネガティブイメージ」，「ニュートラルイメージ」，「ポジティブイメージ」のカテゴリー・グループが得られたので，それを基準として，新たに生成できるカテゴリーがあるかどうかに注意を払うこととした．Table 9にその結果をまとめた．

Table 9 留学生の自己イメージ

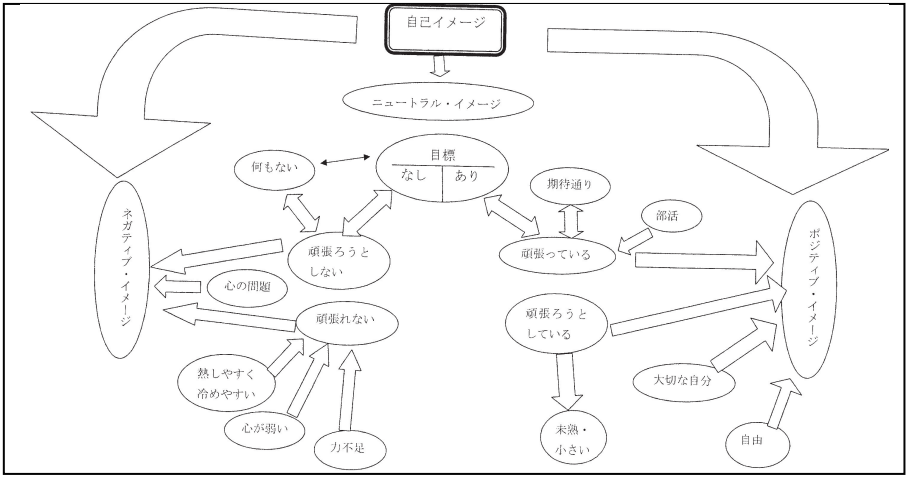
カテゴリー・グループ	カテゴリー	回答の引用（R数字は回答者の分類コード）
ネガティブイメージ	非力な自分	• うさぎ：何でも怖い感じがするから。R10
	不安定な自分	• 雲：天空に浮かんでいる。日本へ留学して、こちらにいったりそちらにいったり、安定じゃないから。R7 • ひこうき：最近の私の気持ちは感情の起伏がはげしい。R8
ポジティブイメージ	頑張っている自分	• 戦士：人生の一番大切な時期にある。未来の戦争（人材戦争）で勝つため頑張っている戦士だ。R5
	自由な自分	• ハト：大学に入ってから自由に何でもやることができるから。R13
	善良な自分	• 天使：天使はやさしくてかわいい。善良な私が好き。R4

留学生のデータによる「ネガティブイメージ」カテゴリー・グループでは，「非力な自分」，「不安定な自分」のカテゴリーが，日本人学生のデータによるカテゴリーに無理なく統合することができた．その他のカテゴリーに加えるデータは得られなかった．同じく，「ポジティブイメージ」カテゴリー・グループでは，「頑張っている自分」は戦士や戦争のメタファーが用いられ，より厳しい状況の中で必死に頑張っている姿が想像された．また，「自由な自分」のカテゴリーでは，ハトのメタファーが用いられ，どこへでも飛んでいけることが「自由」としてポジティブに捉えられていた．同じ空を自由に飛ぶ飛行機や，空に浮かんでいる雲は「不安定な自分」を表すメタファーとして用いられたことは興味深い．「ネガティブイメージ」

では，広々とした空間がよりどころのない，制御不能の不安な状態として捉えられたのに対して，「ポジティブイメージ」では自律的に何の制限もなく動き回れる，自己コントロール感として捉えられていた．ここまでのカテゴリーは前段階の分析によるカテゴリーに組み入れることができたが，「善良な私」というイメージを既存のカテゴリーに分類するのには少し無理があったため，「善良な自分」というカテゴリーを新たに生成した．

自己イメージについての分析をもとに，理論的図式を表した（Logic diagram 3）．

Logic diagram 3: 自己イメージのあり方



「ポジティブイメージ」，「ネガティブイメージ」，「ニュートラルイメージ」の３つのカテゴリー・グループのそれぞれと，各カテゴリーの論理的流れや繋がりをみると，「目標」の有無のカテゴリー，「頑張ろうとしない」，「頑張れない」，「頑張ろうとしている」，「頑張っている」というカテゴリーに繋がりが見られた．

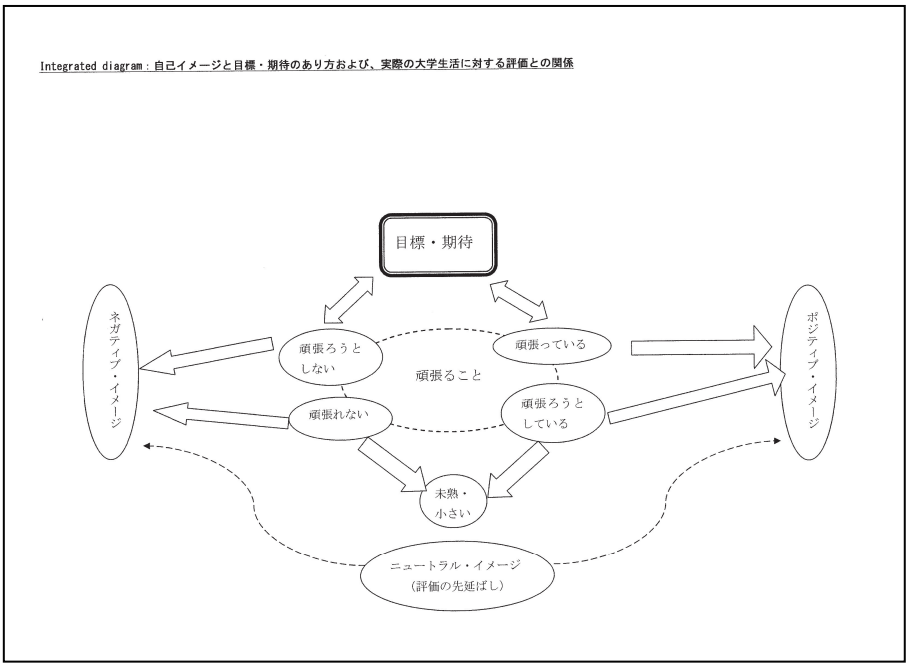
４．まとめ

GTA では，研究の最終段階の作業として，これまでの分析から得られたものを統

合して理論を構築し，ストーリーライン(Story line)を書くということを行う．しかし，それは多くの場合，複雑で困難を伴う作業であるため，これまで個別に描いた理論的図式を統合した図式を描いてみることが提案されている．(Corbin & Strauss, 2008)．この項では，そのプロセスについて述べる．

これまで，「大学生活への目標と期待」，「実際の大学生活の評価」，「自己イメージ」の３つの設問について分析を行い，それぞれに理論的図式を生成した（Logic diagrams 1, 2 & 3）が，その過程で，これら３つの理論的図式の中にいくつかの類似するカテゴリーや連関するカテゴリーの存在に気づいた．たとえば，「目標」はLogic diagram 1で表した「目標や期待」と類似したカテゴリーであると予測される．また，「頑張っている」カテゴリーと繋がりがみられた「期待通り」カテゴリーは，Logic diagram 2 に登場した「期待通り」カテゴリーと類似したものであると予測される．そこで，次のステップとして，これら３つの理論的図式の統合を試みた（Integrated diagram）．

「目標・期待」というカテゴリー・グループには，「目標や期待の有無」と「期待通りかどうか」が含まれる．「ネガティブイメージ」と繋がる，「頑張れない」，「頑張ろうとしない」カテゴリー，「ポジティブイメージ」と繋がる，「頑張っている」，「頑張ろうとしている」カテゴリーの４つに共通する概念として，「頑張ること」というカテゴリー・グループを生成した．「頑張れない」と「頑張ろうとしている」のそれぞれのカテゴリーと「未熟・小さい」カテゴリーとに連関が見られた．これは，同じ小さく未熟な自己イメージではあっても，それがポジティブに受け取られる場合には，まだ不十分ではあるが「頑張ろうとしている」とみなされ，逆にネガティブに受け取られる場合，「頑張れない」自分として認識されることが示唆される．「ニュートラルイメージ」は，現時点では評価を保留した状態であり，今後，大学生活の中でのさまざまな体験を通じて自己評価が進んでいくことが予測される．



Story line

大学生の適応を考える時，個々の学生の評価が重要な要因である．評価の対象としては，大学やそこで出会う人々，経験するさまざまな出来事といった外的要因と，日々生活している自分自身，つまり内的要因が挙げられる．外的要因を評価する時の基準としては，入学前に期待していたことと実際のものとの比較が行われる．それが期待通りか期待に近い場合，学生はその環境を快適であると感じやすく，充実感を抱くことができる．しかし，それが期待を大きくはずれる場合，落胆し，意欲を失ったり不安が高まったりして，不適応状態に陥るものと思われる．このような状態が自己イメージを低下させ，ますます，学生生活への適応を困難にするという悪循環をたどる．

もう１つ注目すべき点は，入学，あるいは新年度を迎えた当初から，目的や期待

もなく，自己評価も低いという状態の学生が少なからず存在することである．彼らは，ほんの些細なできごとが引き金となって自己イメージがさらに否定的になりやすく，その結果として，学業，友人関係，その他で問題を生じやすく，不登校などの不適応状態に陥りやすい．

その一方で，実現可能な期待を持ち，肯定的自己イメージをもつ学生は，困難な中でも自分自身の姿を冷静にみつめ，現実的対処ができる．そして，成功体験を積み重ねていけば，自己評価がさらに上がることになる．もしも，うまくいかないことがあったとしても，自分は「頑張っている」，もしくは「頑張ろうとしている」と肯定的に評価することができれば，不適応に陥ることもないものと思われる．

以上のことから，不適応に陥る学生の減少を図るために，学生支援の立場から３つの提案をする．まずは，期待はずれをできるだけ少なくするということである．そのためには，高校・大学間の風通しをよくし，大学生活とはどのようなものかといったことについての現実認識を高めることが必要である．また，大学側は学生を確保するために「よい事ばかり」を伝えるのではなく，弱点をも含めてきちんとした情報を提供する義務があろう．次に重要なことは，自分にあった目標設定をするということである．適切な目標設定ができれば，その達成に向けての具体的な方策が立てやすい．目標を達成することができたという体験は，３つ目の提案である，自己評価を高めることにも繋がる．自己イメージがその人の行動や考え方に大きく影響を与えることはよく知られている．本研究の結果からも，大学生の適応と肯定的自己イメージを持つことの関係性が明らかになった．学生一人一人が自分と向き合い，自分のことを長所も短所も含めてよく知り，どう生きていくか，じっくりと向き合うことが重要である．つまり，自我同一性の確立の課題に取り組むことに繋がる．すでに多くの大学で試みられているようであるが，たとえば心理学の講義などを利用して，学生に自己と向き合う機会を与えることも一助であろう．また，最初に述べたように，大学には多様な学生が存在する．入試のシステムの多様化がその傾向に拍車をかけている．多様な学生に対して，多様な教育方法を講じていくことが重要であろう．

今回，分析を行ったデータは短文が多く，インタビューによって得られるデータほど深みのあるものではなかった．しかしながら，学生が大学生活に対して抱いている思い，自己イメージの特徴，適応との関係など興味深い結果が得られた．

謝辞

快くデータの提供に応じてくれた一人一人の学生のみなさんに，この場を借りて心よりお礼申し上げます．

文献

Ayano, M. (2006). Intercultural Experience and the Process of Psychological Adjustment: A Case Study of Japanese Students in England. Ph.D. thesis, University of Durham.

Corbin, J. & Strauss, A. (2008). *Basics of Qualitative Research,* 3ed. Los Angeles: Sage Publications.

Cox, M. & Theilgaard, A. (1987). *Mutative Metaphors in Psychotherapy.* London: Jessica Kingsley Publishers.

Erikson, E. H. (1959). Identity and the Life Cycle: Selected papers. *Psychological Issues,* **1**(1).

Ishiyama, F. I. (1988). A model of visual case processing using metaphors and drawings. *Counsellor Education and Surpervision,* **28,** 153-61.

Kirk, J. & Miller, M.L.(1986). *Riliability and Validity in Qualitative Research.* Beverly Hills: SAGE Publications.

Silverman, D. (2000). *Doing Qualitative Research: A practical Handbook.* London: SAGE Publications.

文部科学省（2011）平成23年度学校季報調査速報 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2011/08/11/1309705_1_1.pdf#search='大学 進学率 平成23年度'

高石恭子(2006). ユニバーサル次代を迎えたわが国の大学における学生相談像　鶴田和美・齋藤憲司（共編）学生相談シンポジウムー大学カウンセラーが語る実践と研究ー　培風館　pp. 228-35.
高石恭子(2009). 現代学生のこころの育ちと高等教育に求められるこれからの学生支援京都大学高等教育研究, 15, 79-88.
山田ゆかり(2006). 大学新入生における適応感の検討　名古屋文理大学紀要, 6, 29-36.